

平成28年度 学校評価報告書【国立市国立第一中学校】

<p>学校教育目標</p>	<p>「たくましい、心豊かな人間をめざして」次の目標を設定する。 1. 自ら学び、考え、自主的な行動をしよう。 2. 豊かな創造性を養おう。 3. 思いやる心をもとう。 4. 健康な心身をつくろう。</p>	<p>重点目標</p>	<p>「実感」のある学び、「感謝」のある心、「感動」のある学び 1 確かな学力の向上 「実感」のある学習 2 心の教育の充実 「感謝」の心ある生徒 3 特別活動の充実 「感動」のある学校</p>
---------------	---	-------------	---

学校教育目標	中期的目標	短期的目標	具体的な方策	評価指標	達成状況		分析	改善策	学校関係者評価
					中間評価	最終評価			
習1 確かな学力の向上 「実感」のある学習	①の定着 「問題解決・表現力・コミュニケーション力」の研究を推進し、主体的な学習の展開	①の定着 「問題解決・表現力・コミュニケーション力」の研究を推進し、主体的な学習の展開	今年度も問題解決型学習を取り入れる。実際にやってみて考えた・意見を出し合ったり・分りやすい情報をまとめ直したり・応用問題を解くなどのいろいろな活動を介して、より深く理解したり、うまくできるようになることを目指す。	生徒の授業評価アンケートに「考えながら授業に参加することができたか」の「そう思う」の割合を90%以上(全教員の9割)にする。	C	B	「そう思う」の割合が90%以上の生徒は全教員の5割弱であった。2・3年生は、受験を意識して学習意欲が高まったと考えられるが、1年生は、授業内容が難しくなり、授業についていけない、または授業への関心・意欲が低くなったためと考えられる。また、「そう思う」の割合を80%以上にすると、全教員が達成できていた。今後、評価指標の検討が必要。	①基礎・基本の定着を図り、全員ができる問題を増やしていく。 ②考えながら授業に参加できるように、教員主導でなく、生徒が主体的に学べるような問題解決型学習を計画的に取り入れる。 ③生徒の意欲を掻き立てるような導入や授業展開をする。	コミュニケーション力の数値が全体的に低い。人と関わったり、意思の疎通をすることは一番大事なことで、より力を注いでほしい。具体的には、授業準備をしっかり行い、ペアワークやグループ活動の時間を確保し、その内容を大事にしてほしい。
			ペアワークやグループ活動を取り入れ、全員が発表・意見・議論する場面を多く設定し、生徒の思考を活性化させていく。手を挙げている生徒にはできるだけ全員発言させ、手を挙げていない生徒には答えを選択させるなど、全員参加型の授業展開を行う。	生徒の授業評価アンケートに「自分の意見を述べたり、人の意見を聞く力が高まったか」の「そう思う」の割合を80%以上(全教員の7割)にする。	C	C	「そう思う」の割合が80%以上の生徒は全教員の4割であった。全体的に数値が低い。生徒同士が意見を述べあう時間が少なかったり、話し合う雰囲気が出ていないことも原因として考えられる。いずれにしても、教員のやり方次第である。「そう思う」の割合を70%以上にすると、全教員の8割弱が達成できていた。	①教員の話はなるべく少なくして、生徒に発言させる機会を多くする。 ②ペアやグループワークを多く取り入れ、生徒の意見をつなぎながら問題を解決するようにする。 ③生徒をたくさん褒めて、自信とやる気をつけ、発言しやすい雰囲気をつくる。	また、教員が研修で得た知識を実践に結びつけられるように、実践の振り返りにも力を入れてほしい。
			今年度は、教科・学年・学校全体として一貫性をもたせた授業を行い、一中としての「ユニバーサルデザイン授業」を完成・定着させる。昨年度は模索、今年度は確立、来年度は実践という3年計画で行っていく。(本年度は2年目)	生徒の授業評価アンケートに「工夫があり、意欲的に取り組める授業であったか」の「そう思う」の割合を80%以上(全教員の7割)にする。	B	A	「そう思う」の割合が80%以上の生徒が前回よりも増えて、全教員の7割になった。前回に引き続き、他のアンケート項目よりも数値が高く、校内研修の取り組みの成果が表れていると思われる。教員個々の授業に対する意識や授業力も向上している。	今後もお互いの授業観察を継続し、成果と課題を全体共有し、互いの授業に取り入れ、より一層授業の手法を広げていく。	
2 心の教育の充実 「感謝」のある生徒	「いじめのない学校」を作る	「いじめのない学校」を作る	生徒会本部が生徒会誌でボランティアの意義、ボランティア情報を発信し、夏休みのボランティアへ積極的に参加できる体制をつくる。	夏休みボランティア参加率が全校生徒の延べ5%以上にする。	C	C	夏休みボランティアに1年生3名の生徒が参加し、夏休みボランティア参加率が1%であった。ボランティア活動の意義を伝えるのが不十分で、本校のボランティアに対する学校計画が確定されていない。	ボランティア手帳の配布が夏休み中と遅れてしまい、手帳の説明ができなかった。ボランティア活動参加生徒の経験談等を伝え、ボランティアで得られる喜びを伝える。	ボランティア活動の積極的な参加への啓発は呼びかけだけでは難しい。生徒がより深くボランティアの意義を理解するための活動が必要である。ボランティア活動でより地域と連携していく。
			生徒会本部が放送や朝礼などでボランティア活動(一橋大学前バス停留所の植栽事業、地域の行事など)への参加を呼びかけ、ボランティアに参加した人数や成果を朝礼等で全校に知らせる。	ボランティア参加率が全校生徒の延べ50%以上にする。	C	C	スペシャルプランナーが集会等で呼びかけ、年間を通して、151人がボランティアに参加した。全体の34%であり、累計のため目標を大きく下回った。呼びかけを行っているが、生徒に浸透していない。継続的な呼びかけができる体制ができていない。	スペシャルプランナーの活動を活発にしていくために、来年度は4月から明確な計画を立て、ボランティア普及活動を実施していく。	
			美化週間に年に3回実施し、美化委員を中心に美化の在り方を考え、生徒の校内美化の意識を高めていく。	生徒アンケートにおいて「清掃活動にしっかりと取り組めた」回答を80%以上にする。	C	C	教員の清掃指導が充実していて、1学期の清掃アンケートで「清掃活動にしっかりと取り組めた」生徒が全体で85%だった。しかし各学年でアンケート質問項目が統一していない。	アンケートが学年によって、発問等に相違があるので、統一し生徒の清掃活動に対する意識傾向を解りやすくする。さらに清掃での意識を高めるために評価指標を90%に引き上げる。	
			生徒、教員ともに研修を受けて、ネットに潜むトラブル事例を新たに知り、その問題解決への意識を高める。	生徒アンケートにおいて、「ネットトラブルに遭わないためになんかしてはいけないことが分かった」回答を90%以上にする。	B	B	教員研修により、現在の情報処理の課題が明確になり、生徒の意識を高める情報モラル教育指導につながった。10月の生徒アンケートで評価指標の質問を問えなかった。	学習したことを風化させないよう、指導していき、3月に再度アンケートを実施する。	生徒を取り巻く情報社会は変わっていくので、SNSルールの見直しが必要である。情報モラル教育を行っていくうえで、影の部分だけでなく、情報社会の光と影の部分をバランスよく学習することが必要である。
			生徒がグループワークで情報モラルに関する課題を明確にし、解決、発表することで、理解を深め、発信していく。	生徒アンケートにおいて、「班で協力して課題を解決することができた」回答を90%以上にする。	B	B	2年生の情報モラル学習では、教材研究が充実していたため、各班で積極的な問題解決についての話し合いがなされていた。3年生はSNSノートを使用した授業を1回行った。1年生では、2年生の発表をきくことしかできていない。	今年度の情報モラル推進校としての取り組みを生かしていくために、来年度の総合的な学習の時間、道徳の計画に組み込んでいく。	
			ネットトラブルに遭わないように、日々のネット使用状況を把握し、それをもとに中学校全体でのSNSルールと、各家庭でのSNSルールを作成する。	生徒アンケートにおいて、すべての項目でルールを守る意識が持った生徒を90%にする。	B	A	SNS一中ルールが全校生徒採決を経て策定された。希望生徒で策定委員を充足し、策定委員を中心に案をまとめ、学級での討議を経てSNSルールを策定できた。生徒自身の考えでルールを作った実感をもたせられた。生徒アンケートにおいて、すべての項目でルールを守る意識が持った生徒が92%であった。SNS一中ルールを廊下に掲示し、生徒に周知させた。	今年度初めて本校で作成したSNSルールについて、話し合い、全校体制で改善していく体制を整える。	
3 心に残る学校行事の充実 「感動」のある学校行事の充実	心に残る学校行事の充実	心に残る学校行事の充実	いじめ対策委員会を定期的に実施し、いじめの予防、早期発見に努める。小さい問題でも細かく指導できる体制を整える。	生徒アンケートにおいて、「仲間が嫌がる行動や態度を慎もうという気持ちをもてた」回答が90%以上にする。「いじめをはやした」「いじめを見てみないふりをした」回答がそれぞれ10%未満にする。	C	B	2月生徒アンケートにおいて、「仲間が嫌がる行動や態度を慎もうという気持ちをもてた」回答が99%で、「いじめをはやした」の回答が1%、「いじめを見てみないふりをした」の回答が3%だった。対策委員が中心となり学校全体でいじめの事例に対する取り組みができた。3学期は対策委員会を月予定に組み込んで実施した。	来年度は、委員会を月行事予定に組み込み、定期的実施する。いじめが認知された場合には緊急に委員会を開く体制を維持する。いじめをなくすために、いじめはいけないことを強調し、全校体制で取り組む体制を維持していく。	生徒アンケートの評価指標で「いじめを見ないふりをしてどう思ったか」を確認するべきであり、評価指標の見直しが必要である。一人ひとりがいじめに対してどう思っているのかより深く知ることが必要である。
			気を校をゆ内作る全るさ体ない「い」い券じ囲め	いじめ防止プログラムを実施し(1年生)、今後のスクールパディの活動を活性化させる。	B	B	講師による計5回のいじめ防止プログラムの授業を行った。3学期に希望者が3回のスクールパディの研修を受け、18人のスクールパディが誕生した。スクールパディになるための研修だけではなく、1年生全員のいじめ防止への意識を問えなかった。	来年度も、研修により自主的なスクールパディの活動を活性化させるとともに、道徳授業でいじめに関する課題を積極的に取り上げていく。	
			朝礼、放送等でスクールパディがいじめ防止のための呼びかけを工夫し、気軽にスクールパディに相談できる体制を整える。	B	B	6月にスクールパディが集会で活動について発表を行った。8月末に教育フォーラムでいじめについての討議を行った。11月に生徒会本部、生活委員、スクールパディがあいさつ運動を行った。また11月の生徒会集会以生徒会本部が中心にピースツリーを制作した。2月のふれあい月間ではスクールパディとしての活動が行えなかった。	スクールパディ年間活動計画を立てる。スクールパディとしての意識を持続させるために研修等を行っていく。		
動3 心に残る学校行事の充実 「感動」のある学校行事の充実	心に残る学校行事の充実	心に残る学校行事の充実	体育大会では、学年種目やクラスリレーなどでクラスで協力するために何をすべきかを考えさせる。	生徒アンケートにおいて「クラスや学年で協力をし、行事を成功させよう」と取り組むことができた。「実行委員の取り組みが成功に導いたと思う」の回答が80%以上にする。	B	A	各クラスの一員としての意識を担任がもたせることができたため、生徒アンケートにおいて「クラスや学年で協力をし、行事を成功させよう」と取り組むことができた」の回答が98%だった。	生徒たちがより積極的に取り組めるように体育大会の運営を見直す。また何が成功なのか明確にする。	生徒の行事での頑張りを、ホームページ等で発信し、家庭・地域に伝えていく。
			校外学習(1,2年)修学旅行(3年)では、実行委員や班長が中心となり、生徒主体で運営させる。	B	B	1年生は生徒自らコースを決めて、ルールを守りながら、班で浅草・上野方面に行った。3年生は修学旅行でルールを守り、班行動等活動し心に残る行事となった。実行委員等生徒中心の学習であった。	全体的には計画通りに行えたが、まだ一部ルールが守れない生徒がいた。きめ細かい指導が必要である。		
			合唱コンクールでは、実行委員が中心となり練習計画を立て、パートリーダー・指揮者・伴奏者が中心の練習を進める	B	A	生徒アンケートにおいて「クラスや学年で協力をし、行事を成功させよう」と取り組むことができた」の回答が97%「実行委員の取り組みが成功に導いたと思う」の回答が95%だった。教員が、生徒たちで協力し合唱練習できる環境を整えていた。	スムーズな進行を徹底し、生徒がひたむきにがんばれる環境をさらに整えていく。		

達成状況の指標 A:100%~80% B79%~50% C49%~0%